

## 「旧約の信仰者たちの手本」 サムエル (11:32~34)

32 これ以上、何を言いましょうか。もし、ギデオン、バラク、 サムソン、エフタ、  
 また ダビデ、サムエル、 預言者たちについても話すならば、時間が足りないでしょう。  
 (ヘブル人への手紙 11:32)

## ■前回までの内容の確認

## 1. 手紙の背景と執筆目的

- (1) ヘブル人への手紙を書いた著者、そしてこの手紙を受け取った読者も、直接イエスを見聞きしたことはない第2世代のユダヤ人信者である。
- (2) この手紙が書かれた時期は、紀元64年から66年頃と推定される。ユダヤ人の間でローマ帝国に対する反乱の機運が高まる中、愛国主義的な同胞たちから教会に対する迫害が激しさを増していた。特にエルサレムに近い地域の教会では、命の危険を感じるほどであった。
- (3) 一部のユダヤ人信者の中には、迫害を鎮静化するため、いったんエルサレムの神殿祭儀に戻ろうという動きが出始めた。この背教の動きに対して、著者は警告のためにこの手紙を書いた。

## 2. 手紙の内容と11章

- (1) ユダヤ教の三本柱は、「天使」、「モーセ」、「レビ族アロンの家系の祭司による祭儀」である。著者は、手紙の前半で、神の御子であるメシアは、天使にも、モーセにも、そしてアロンにも優ることを教える。
- (2) 手紙の後半は、前半の教えに基づき、信者はどのように歩むべきかを説明する。その中で、11章は、旧約聖書に記録された信仰の先輩たちの手本にならおうという部分である。時代を追って、
  - ① 族長時代以前：アベル、エノク、ノア
  - ② 族長たち：アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ
  - ③ 出エジプトから荒野の旅：モーセの両親、モーセ、イスラエルの人々、ラハブ
- (3) 11章32節で、二人一組で三組、6人の名前をあげている。
  - ① 士師記の時代前期から二人の士師、ギデオンとバラク
  - ② 士師記の時代後期から二人の士師、サムソンとエフタ
  - ③ 士師記の時代の後、王ダビデと最後の士師であり預言者であるサムエル
  - ④ 「預言者たち」は原文では、「またダビデとサムエルと預言者たち」とあり、サムエルの後に続いた預言者たちを指している。
- (4) 三組は時間的順序になっているが、それぞれ二人の時間的順序は逆である。
  - ① バラク→ギデオン、エフタ→サムソン、サムエル→ダビデ

## 3. なぜ著者は、ここで、それぞれ、逆に後代の人を先に記したのでしょうか？(清水雑感)

- (1) 過去を振り返ると、今の自分が、多くの信仰の先輩のおかげであることがわかる。
  - ① ギデオンの前には、偉大な信仰の先輩バラクがいた。
  - ② サムソンの前にも、偉大な信仰な先輩エフタがいた。
  - ③ ダビデの前にも、偉大な信仰の師、サムエルがいた。
  - ④ ヘブル人への手紙の読者たちは、第2世代の信者たちである。彼らの前にも、

信仰の先輩である初代のユダヤ人信者たちがいる。そして、初代のユダヤ人信者たちは、迫害の中で信仰を守り通した。

- ⑤ その信仰の先輩たちを思い浮かべつつ、旧約の信仰者たちの手本にならおうという著者の気持ちが伝わってくるようである。
- (2) 信仰者はひとりで立っているのではない。自分に信仰を伝達してくれた先輩がいる。そして今、自分もまた苦難の中で勇気をもって、神に信頼する生活をしていく。これが次の世代につなぐ信仰の証である。
4. 前回までに、ギデオン、バラク、サムソン、エフタと4人の士師について学んだ。今回から、「ダビデとサムエル」に入る。この二人の信仰にはどのような手本が見られるのか。サムエルとダビデは活動の時期が一部重なり、両者は密接な関係がある。私たちが理解しやすいように、時間的順序に沿って、まずサムエルから取り上げる。

#### ■前回の内容 士師たち ④ エフタ から

##### エフタの娘の献身はサムエルの成長期に重なる

1. エフタの人物像：「遊女の子」、「ごろつきが集まって来て、彼といっしょに出歩いた」という箇所だけで、エフタの人物像を判断することはできない。
- (1) エフタは、「勇士」と記された。士師記ではギデオンとエフタだけである。
- (2) エフタは、預言者サムエルが挙げる代表的な士師4人のひとり（Iサム12:11）
- ① エルバアル＝ギデオン
  - ② ベダン＝バラク
  - ③ エフタ
  - ④ サムエル・・・サムソンの「ペリシテ人の手から救い始める」（士師13:5）  
という働きを引き継ぎ、完成させたのがサムエル（Iサム7:13）
- (3) エフタは、ただ戦うのではなく、事前に戦争を回避するための外交交渉をした。
- (4) エフタは、正確な歴史的 understandingのもとに、アモン人の王に彼の誤りを正すメッセージを送った。
- (5) エフタの戦い方は・・・
- ① 合理的。準備万端で戦意十分の相手をおかし、態勢がゆるんだところを突いて、一気に攻撃する。終始戦いの主導権を握って、自分が思い描いたとおりに戦う。
  - ② 戦略的。敵の本国に打撃を与え、再び戦争を仕掛けてこないようにする。
  - ③ 彼自身の証言（12:2~3）
    - イスラエルの主要部族であるエフライム族にも参戦を要請した。これはおそらく、アモン人の王との交渉をしている間である。戦争回避の交渉をするとともに、戦争となったときの準備を平行して進めていた。
    - エフライム族は助けてくれないことがわかった。少ない兵力でどのように戦うか、エフタが考え抜いた作戦が①と②であった。彼はこの作戦に「自分のいのちをかけた」。
    - 「そのとき、主は彼らを私の手に渡された」。自分の手柄を誇るのではな

く、勝利は神が与えてくださったものであると証言した。

- (6) エフタには未婚のひとり娘がいた。妻は登場しないので、妻は早くに亡くなっていたと思われる。再婚もせず、女性関係の記事もない（サムソンとは対照的）。
2. エフタの生涯をまとめると、次のようである。
- (1) 遊女の子として生まれるという不遇な生い立ちにもかかわらず、よく学び、モーセ五書とヨシュア記を深く理解していた。これが、のちにアモン人の王へのメッセージにつながる。
- (2) 父ギルアデの養子になった。エフタが父から信頼と愛情を受けていたことがわかる。
- (3) 異母兄弟たちはエフタに財産の一部が分与されるのを惜しみ、彼を家から追い出した。命の危険を感じたエフタは、遠くシリヤ・アラムの地、トブまで逃げた。ギデオンのそばめの子だったアビメレクが、異母兄弟たちを殺したのとは対照的である。
- (4) 彼のもとには、ごろつきたちがひとりまた一人と集まり、警護や傭兵をして生活を立てるようになった。アビメレクが「ごろつきの、ずうずうしい者たち」を金銭で雇ったのとは違い、エフタの場合は人が寄ってきた。この点は、エフタはダビデに似ている（Iサム22:1~2、Iサム25:16）。
- (5) エフタは、政治的外交的手腕と戦略的軍事指揮能力を兼ね備えた人物である。士師の中では、最も「士師」にふさわしい資質を持っていたと言える。そのまま行けば、イスラエルの王に最も近い人物であったかもしれない。しかし、彼はユダ族ではない。主は、彼に6年間だけの士師職の期間を与え、かつ、彼の跡を継ぐような男子を、子にせよ孫にせよ、残させなかった。
- (6) 彼のひとり子の娘は、独身のまま、その生涯を主の幕屋で仕えることになった。その時期は、少年サムエル、後の預言者サムエルがシロの幕屋で成長する時期と重なる。シロの幕屋での信仰的な環境は決して良いものではなかった。エフタの娘の存在は、少年サムエルの成長にとって有益であったと想像される。（参照、別紙「士師記年表」）
- (7) エフタは、アモン人との戦いからわずか6年で、地上の生涯を終えた。娘の年代から想像すると、エフタは若くして死んだと思われる。彼は「ギルアデの町々（複数形）」（12:7）に葬られたとあるので、墓は複数設置されたことになる。彼の遺骨が分骨されたのはなぜか？ 子がなく死んだ彼のために、彼と行動を共にした「ごろつきたち」か、エフタの士師としての働きを高く評価したギルアデの人々が、自分たちの町に墓を設けたのであろう。短い士師職であったが、エフタは代表的な士師のひとりとして、聖書に名をとどめることになった。

■本日の内容 サムエル

1. サムエルは、預言者そして最後の士師である。彼の信仰の手本を一言でいえば、「信仰によって、正しいことを行った」（ヘブル11:33）である。← Iサム12:1~5、23b~24

## 2. サムエルの生涯

- (1) サムエルの誕生と献身 (Iサム 1:1~2:11a) 家系 (I歴 6:33~38)
- レビ→ケハテ→イツハル→コラ (民 16章、26:11)・・・→エルカナ
  - エルカナ→サムエル→ヨエル (8:2~3) →ヘマン (I歴 25:4~5)
- (2) 祭司エリの息子たちの非行とサムエルの成長 (2:11b~26)
- (3) 神の人による祭司エリへの警告 (2:27~36)
- (4) 少年サムエルに主のことばが語られる (3:1~18)
- (5) サムエルは成長して預言者として立つ、主がシロでサムエルに現れる (3:19~21)
- BC 1067 (6) のちに「エベン・エゼル」という地名になる場所での戦いとエリの死 (4:1~22)
- (7) ペリシテ人に奪われた神の箱 (~~5:1~7:1~~) → この18年後にダゴン神殿、サムソンにより崩壊
- BC 1047 (8) エベン・エゼルの戦い (7:2~14)
- (9) サムエルの士師としての働きと彼の息子たち (7:15~8:3)
- (10) サウルに油をそそぐ、ミツパでの王への指名 (8:4~10:27) BC 1043?
- 9:2 「美しい若い男」
- (11) アモン人の侵攻、ヤベシュ・ギルアデの危機 (11:1~11)
- (12) ギルガルで改めてサウルを王とする (11:12~12:25) BC 1030
- 11:14 「王権を創設する」直訳【王国を再建する】
- (13) ペリシテ人との戦い、サウル王の失格 (13:1~14:46) BC 1028
- 13:1 サウルは○歳で王となり、2年間イスラエルの王であった。  
ASV (英語訳) サウルは【40】歳で王となった。その2年間治めたときに・・・
  - 13:13 あなたの神、主が命じた命令 (単数形) を守らなかった。
- (14) サウル王の努力とアマレク聖絶命令に対する違反 (14:47~15:35)
- (15) ダビデへの油注ぎ (16:1~13)
- (16) サウルから主の霊が離れる (16:14~23)
- (17) ペリシテ人ゴリアテとダビデの戦い (17:1~58)
- (18) ダビデの登用とサウルの恐れ、ダビデはサムエルのもとへ (18:1~19:24)
- (19) ダビデはサウルの子ヨナタンのもとへ、ヨナタンとの別れ (20:1~42)
- (20) ダビデの逃亡、ノブ→ガテ、狂人を装う (21:1~15)
- (21) アドラムのほら穴→モアブのミツパ (両親を預ける) →ユダの地・ハレテの森、サウルはノブの祭司たちを虐殺、祭司エブヤタルがダビデのもとへ (22章)
- (22) ケイラ救援、しかしサウルの追手がかかり、ケイラを出て、荒野へ、さらにエン・ゲディの要害へ (23章)
- (23) サウルがダビデを追ってエン・ゲディの荒野へ、サウルとダビデの約束 (24章)
- BC 1020 (24) サムエルの死、ダビデ【20歳】はラマを弔問し、パランの荒野へ (25:1)
3. ダビデとサムエルと賛美 (I歴 9:17~34、15:16~28、16:4~38、39~42、23:1~5、25:1~8)
- I歴 9:22 「ダビデと予見者サムエルが彼らの職責を定めたのである」
4. 神殿の仕様書 (I歴 28:11~19)
5. ソロモンの神殿礼拝 (II歴 8:14)
6. 詩篇 42 ほか「コラの子たちのマスキール」

## 士師記年表

■士師記の時代 (Ariel's Bible Commentary "Judges & Ruth"と聖書辞典による、作成責任は清水)

*1	士師／リーダー	時期(紀元前)*4	年数	備考	救助者?
		(1446-1406)	40	出エジプトから荒野の旅	
		(1406-1400)	7	約束の地の征服(ヨシュ 14:7~10)	
		(1400-1390)	10	分割からヨシュアの死迄	
		(1390-1381)	8	クシャン侵攻迄*6	
		(1381-1373)	8	アラム・ナハラーム(メソポタミア)の王クシャンによる支配	
1	オテニエル	(1373-1334)	40		○1
		(1334-1316)	18	モアブ人による支配	
2	エフデ	(1316-1237)	80	*7	○2
3	シャムガル	エフデと同時期		ペリシテ人からの圧迫	○3
4	女預言者デボラ	(1237-1217)	20	カナン人の王ヤビンによる圧迫	
5	バラク	(1217-1198)	20	*8	○4
		(1198-1191)	7	ミデヤン人による圧迫	
6	ギデオン	(1191-1151)	40		○5
	【アビメレク】	(1151-1149)	3	兄弟を殺し、私的支配	
7	トラ	(1149-1126)	23		×
8	ヤイル	(1126-1105)	22		×
		(1105-1087)	18	東側アモン人*2	
9	エフタ	(1087-1081)	6	エフタの娘は幕屋で仕える	○6
10	イブツァン	(1081-1075)	7		×
11	エロン	(1075-1065)	10	西では契約の箱を奪われる	×
12	サムソン	【1069-1049】		誕生は(1087)頃*3	○7
13	アブドン	(1065-1058)	8		×
	エリ	(1107-1067)		ペリシテ人に契約の箱を奪われて死す	
	サムエル	(1067-1020)	38	【年数20は、アブドン終了1058年から】	
	(預言者としての活動は、1067以前からIサム3:20)	(1047) Iサム7		エベン・エゼルの戦い	○
		(1043, 1030?)		サウルを王とする *5	
		(-1020)		ダビデに油注ぎ、死す・ダビデ20歳逃亡中	
		(1020-1011)	10	サウル王の統治後期・ダビデ逃亡生活	
		(1010-1003)	7	ダビデ王30歳ヘブロン	
		(1003-970)	33	ダビデ王エルサレム	○
		(970-966)	4	ソロモン王神殿着工まで	
		合計*7	480	I列6:1	

前期

後期

- \*1 士師記には、13人の士師が記録されている。祭司エリ（Iサム1:3、4:18）と預言者サムエル（Iサム3:20、7:15）は、士師記に記録ないが、士師である。
- \*2 9番以降の士師は、活動の領域が、ヨルダン川の東と西に分かれる。東はアモン人、西はペリシテ人の攻撃を受けたため（士10:7~8）。東ではエフタ以下4名。西では、エリ、サムソン、サムエル。
- \*3 士13:1のペリシテ人の支配40年間は、サムソンが誕生する頃からエベン・エゼルの戦い迄
- \*4 時期は、出エジプトを（紀元前1446年頃）と仮定し、コンメンタリーP.18「荒野の旅40年、ヨシユアの時代25年」の記述に基づく。ヨシユアの時代は、コンメンタリーP.17では17年であるが、25年のうち、ヨシユアが死ぬまでを17年、死後クシヤンの侵攻を受けるまでを8年、合計25年が聖書の記述と整合すると考える。士師オテニエル以降、エリ、サムエルまでの活動時期の期間は、コンメンタリーP.7に基づく。
- \*5 サウルが王となった時期については、不明。
- Iサム13:1「サウルは30歳で王となり、12年間イスラエルの王であった」。原文では「サウルは〇歳で王となり、2年間イスラエル王であった」。欠けている年齢を「30」と推定し、2年間を十の位の単語が欠けていると推定して「12」年間と訳したものである。この訳では、サウルの死亡時の年齢が42歳となる。サウルが死んだときに息子のイシュ・ボシエテは40歳である（IIサム2:10）ことを見ると、この訳は誤りである。
- Iサム13:1の「2」年間を、「20」年間と推定する説（コンメンタリーP.17）や、サウルの王となった時期を、紀元前1043年頃と推定する説（コンメンタリーP.6）などがある。
- 使徒13:21では、サウロの在位期間を「40年間」としている。サウロ王が戦死した紀元前1010年から40年さかのぼると、紀元前1050年頃となる。この時期は、サムエルが士師として指導的立場にあったころである。サウルの登場は、エベン・エゼルの戦い（紀元前1047年頃）よりも後なので、サウルが王となった時期を紀元前1050年頃とするのは無理がある。「40年間」というのは、サムエルとサウルによる統治期間を通算して指していると考えられる（コンメンタリーP.18）。
- \*6 ヨシユアの死を紀元前1380年頃とする説（コンメンタリーP.18）があるが、士師2:7~10によると、ヨシユアが死んでからクシヤンに侵攻されるまでに相当期間があったとみられるので、ヨシユアの死を紀元前1390年頃とした。
- \*7 士師4:1によると、エフデが死んだとき、すでにイスラエルは偶像崇拜に陥っていた。士師が存命中にも士師の指導に従わないことがあったと士師2:17も記している。エフデが死んで、すぐにイスラエルはヤビンに圧迫されるようになった。
- \*8 イスラエルがヤビンの圧迫を受ける時期20年間と女預言者デボラが士師としてイスラエルをさばいていた時期は重なる。士師5:31の40年間は、士師デボラとバラクが立っていた時期を指すと解すると、バラクによる解放後の期間は20年間となる（コンメンタリーP.7）。ただし、バラクによる解放後の期間を40年とする説もある（コンメンタリーP.17）が、注4の時期設定に従った。
- \*9 年数は、聖書が記す各時期の数えの年数であり、単純合計すると、480年を超える。紀元前1446年の出エジプトから紀元前966年の神殿着工まで480年である（I列6:1）。